

小野町総合計画

(2023～2027)

総論・基本構想

(案)

小 野 町

目次

第1部 総論	1
第1章 はじめに	2
1 計画策定で重視したこと.....	2
2 「総合計画」とは.....	3
3 計画策定の目的.....	3
第2章 計画の役割、構成と期間	4
1 計画の役割.....	4
2 計画の構成と期間.....	5
第3章 小野町の現状と課題	6
1 町の概要.....	6
2 町の特性.....	12
3 町民ニーズ.....	15
4 社会環境の変化.....	26
5 町発展に向けた主要課題.....	30
第2部 基本構想	33
第1章 小野町の将来像	34
1 まちづくりの基本姿勢.....	34
2 将来像.....	35
3 人口の推計と見通し.....	36
第2章 計画の体系と方針	37
1 計画の体系.....	37
2 基本目標ごとの方針.....	38

第1部 総論

第1章 はじめに

○町民等参加による計画づくり

本計画は、町民に将来のまちづくりを自分ごととして捉えていただくため、子どもから大人まで幅広い年代の方々や町外の学生に参画いただきながら策定しました。

1 計画策定で重視したこと

本計画は、これまでの総合計画の課題等を踏まえ、新たな時代の総合計画として、次のことを重視して策定しました。

◆ “読んで、見てわかる” 計画づくり

本町にかかわる多くの人々が本計画を読んで理解し、まちづくりに積極的に参画・協働することができるよう、策定過程における町民参画、町民ニーズの反映を重視するとともに、町民の目線に立った、シンプルでわかりやすい構成・内容・表現とし、“読んで、見てわかる” 計画として策定しました。

◆ “強み” を活かす計画づくり

本町ならではの魅力をさらに高め、町民がずっと住みたくなるまちづくり、町外の人に移り住みたくなるまちづくりを進めるため、特性、いわゆる“強み”を再発見・再認識し、それを活かして小野町らしさを追求する、明るく前向きな計画として策定しました。

◆ “持続可能なまち” につながる計画づくり

厳しい財政状況が続く中、自立したまちをつくり上げ、将来にわたって持続していくことができるよう、行財政改革との密接な連携の確保、施策の選択と集中、計画・実施・検証・改善の仕組みの充実などを行い、“行財政運営の効率化”につながる計画として策定しました。

2 「総合計画」とは

「総合計画」とは、全国それぞれの地方自治体が、将来どのようなまちになることを目指すのか、そしてそれを実現するために、どのような取り組みを行うのかをまとめた計画です。

多くの地方自治体では、目指す将来像やまちづくりの方向性などを示した「基本構想」と、それに基づく主な取り組みなど示した「基本計画」で総合計画を構成しています。

本町では、計画的に業務を進めるため、分野ごとにたくさんの計画を策定していますが、総合計画は、こうした計画のうち、一番上に位置する「最上位計画」であり、最も重要な計画です。

3 計画策定の目的

本町では、平成29年度に「未来へ おのまち総合計画」（平成30年度から令和4年度までの5年間の計画）を策定し、『人も自然も元気 みんなの笑顔が かがやくまち』という将来像の実現に向けた様々な取り組みを積極的に進めてきました。

しかし、この計画の策定後、およそ5年を経過した今日、少子高齢化・人口減少の急速な進行や全国各地における大規模災害の発生、新型コロナウイルス感染症の流行をはじめ、社会環境は大きく変化しているほか、これらに伴い、町民ニーズも大きく変化し、新たな課題が生まれてきました。

こうした社会環境や町民ニーズの変化に的確に対応しつつ、より一層魅力と活力のある小野町をつくり上げ、将来にわたって持続していくため、新しい総合計画をここに策定します。

第2章 計画の役割、構成と期間

1 計画の役割

本計画は、次のような役割を持つ計画として策定しました。

小野町民にとっては

まちづくりの共通目標

まちづくりの方向性や必要な取り組みを行政と共有し、まちづくりに積極的に参画・協働するための共通目標です。

小野町行政にとっては

総合的な経営指針

新たな時代の自立した小野町をつくり上げ、将来にわたって持続していくための総合的な経営指針です。

国・福島県・周辺自治体に対しては

小野町の主張・情報発信

施策実現に向けた協力要請など小野町の主張を示すとともに、小野町の情報を広く発信するものです。

2 計画の構成と期間

本計画は、「基本構想」、「基本計画」、「実施計画」の3つからなっています。それぞれの構成と期間は、次のとおりです。

基本構想

本町が5年後に目指す将来像と、それを実現するための計画の体系や方針などを示したものです。

計画の期間は令和5（2023）年度から令和9（2027）年度までの5年間とします。

基本計画

基本構想に基づき、各分野において取り組む主要な施策や数値目標などを示したものです。

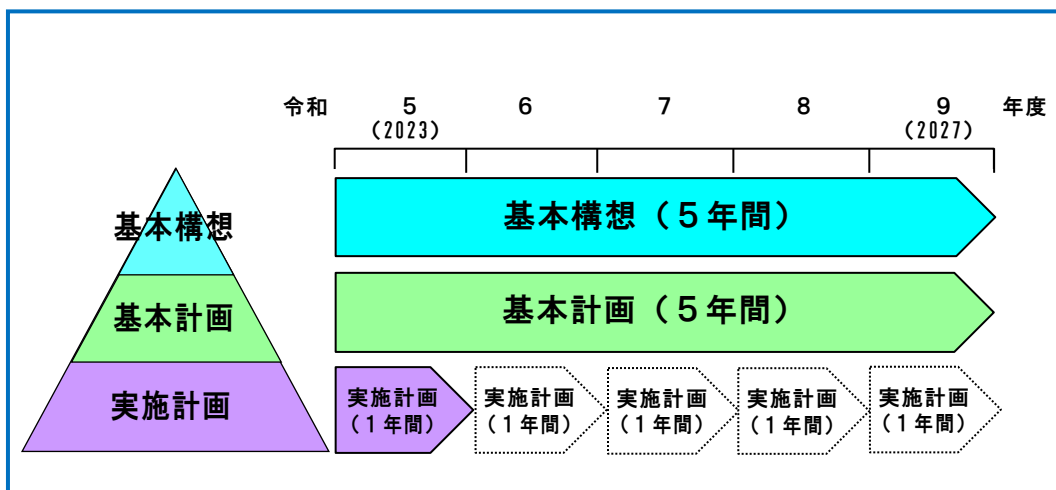
計画の期間は基本構想と同様に、令和5（2023）年度から令和9（2027）年度までの5年間とします。

実施計画

基本計画に基づき、具体的に実施する事業名や事業内容、事業費などを示したもので、別途策定します。

計画の期間は1年間とし、毎年度見直しを行います。

計画の期間



第3章 小野町の現状と課題

1 町の概要

(1) 位置と地勢

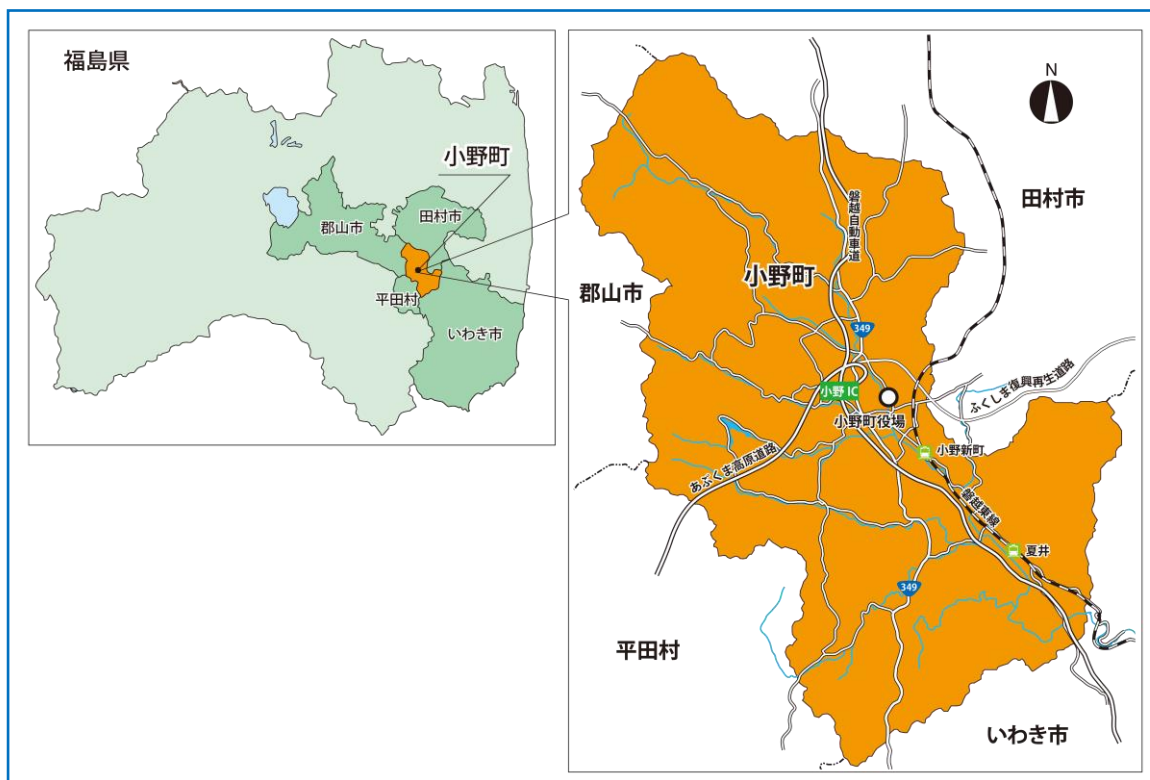
福島県の中通りと浜通りを隔てる阿武隈高地の中部に位置する、標高700mを超える山々に囲まれた丘陵地帯。

本町は、福島県の中通りと浜通りを隔てる阿武隈高地の中部、田村郡の南部に位置し、北から東にかけては田村市、東から南にかけてはいわき市、西は平田村と郡山市に接しています。

東西12.45km、南北15.95km、総面積125.18km²の町で、四方を高柴山や一盃山、十石山、矢大臣山などの標高700mを超える山々に囲まれた丘陵地帯です。

町の中央には、右支夏井川が流れ、下流の夏井地区で太平洋に注ぐ夏井川と合流しています。その流域の平坦地に市街地が形成されているほか、夏井川水系の支流として、車川や黒森川、十石川などの河川が流れ、これらの流域に耕地が形成されています。

小野町の位置と概要



(2) 町の歩み

「昭和の大合併」により、昭和30年に小野新町・飯豊村・夏井村の1町2村が合併して小野町が誕生した。

言い伝えによると、本町の発祥は天武天皇、持統天皇の時代（西暦670～680年頃）に遡ります。

その後、桓武天皇の時代（西暦800年頃）に、征夷大將軍として朝廷の命を受けた坂上田村麻呂が、当時蝦夷地（えぞ）といわれていたこの地を含む地帯一帯に大和の新しい文化をもたらしたこと、坂上田村麻呂の東征後にこの地にやってきた小野篁（おののたかむら）によって産業・文化が伝えられたことが今日の小野町の基をなしたといわれています。

町内の歴史ある神社・寺院の多くも西暦800年前後に創建、開基をみています。

その後、次々と支配層が交代する激動の中世、近世を経て、明治22年の町村制施行により、小野新町村・飯豊村・夏井村が発足しました。また、明治29年に、小野新町村は町制を施行して小野新町となりました。

その後、「昭和の大合併」により、昭和30年に、これら1町2村が合併して現在の小野町が誕生しました。

そして「平成の大合併」の時代を迎え、本町も合併について検討しましたが、合併せずに自立する方針を決定し、現在に至っていません。

(3) 人口

① 総人口

総人口は令和2年の国勢調査で9,471人。直近5年間の減少率が最も高く、減少が加速している。

本町の総人口は9,471人で、平成27年の10,475人から1,004人減少し、減少率は9.6%となっています。これまでの推移をみると、直近5年間の減少率が最も高く、減少が加速していることがわかります。

県中地域12市町村の直近5年間の推移をみると、本町は減少率が高い方から3番目で、人口減少が大きい自治体となっています。

総人口と減少数・減少率

	人口(人)	減少数(人)	減少率(%)
平成17年	12,105	450	3.6
平成22年	11,202	903	7.5
平成27年	10,475	727	6.5
令和2年	9,471	1,004	9.6

資料：国勢調査

国、県、県中地域との比較（直近5年間の減少率が低い順）

	平成27年の 人口(人)	令和2年の 人口(人)	減少数 (人)	減少率 (%)	
県 中 地 域	鏡石町	12,486	12,318	168	1.3
	郡山市	335,444	327,692	7,752	2.3
	須賀川市	77,441	74,992	2,449	3.2
	玉川村	6,777	6,392	385	5.7
	三春町	18,304	17,018	1,286	7.0
	天栄村	5,611	5,194	417	7.4
	石川町	15,880	14,644	1,236	7.8
	浅川町	6,577	6,036	541	8.2
	田村市	38,503	35,169	3,334	8.7
	小野町	10,475	9,471	1,004	9.6
	古殿町	5,373	4,825	548	10.2
	平田村	6,505	5,826	679	10.4
福島県	1,914,039	1,833,152	80,887	4.2	
全国	127,094,745	126,146,099	948,646	0.7	

資料：国勢調査

② 年齢別の人口

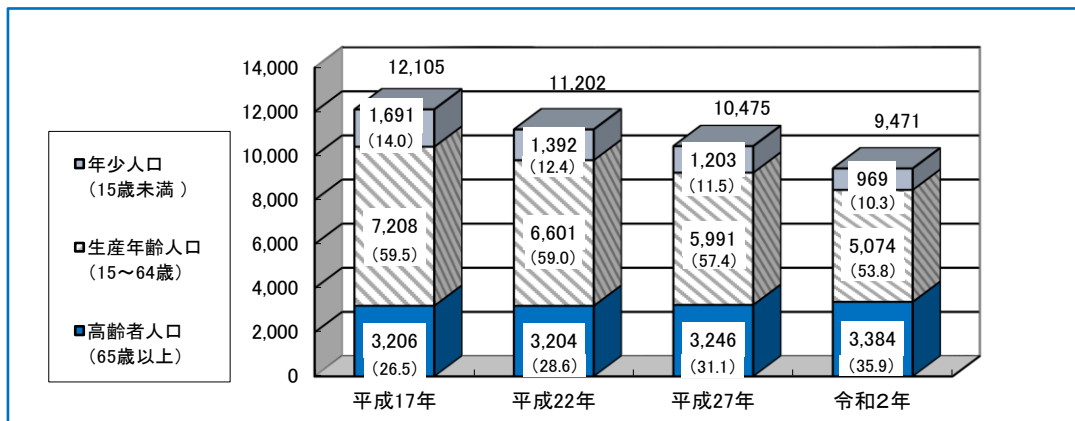
国や県よりも少子高齢化が進行しており、特に高齢化が急速に進んでいる。

年齢（3区分）別の人口は次のとおりで、15歳未満の年少人口と15～64歳の生産年齢人口が大幅に減少し、65歳以上の高齢者人口が微増傾向にあります。

それぞれの比率を全国及び福島県と比べると、年少人口比率は全国平均や福島県平均を下回り、高齢者人口比率は全国平均や福島県平均を大幅に上回り、少子高齢化が進行していること、特に高齢化が急速に進んでいることがわかります。

年齢（3区分）別人口の推移

（単位：人・％）



注) 総人口には年齢不詳を含む（比率は年齢不詳を除いて算出）。 資料：国勢調査

年齢（3区分）別人口比率の全国・福島県との比較（令和2年）

	全国	福島県	小野町
年少人口比率（％）	12.1	11.5	10.3
生産年齢人口比率（％）	59.2	56.7	53.8
高齢者人口比率（％）	28.7	31.7	35.9

注) 比率は年齢不詳を除いて算出。

資料：国勢調査

(4) 就業構造

① 就業者総数

就業者総数は4,785人。就業者総数の減少率は、総人口の減少率よりも大幅に高く、特に就業している町民の減少が急速に進んでいる。

本町の就業者総数は4,785人で、平成27年の5,503人から718人減少し、減少率は13.0%となっています。

総人口の減少率(9.6%)と比べると、大幅に高くなっており、特に就業している町民の減少が急速に進んでいることがわかります。

就業者総数と減少数・減少率

	就業者総数(人)	減少数(人)	減少率(%)
平成17年	6,321	287	4.3
平成22年	5,470	851	13.5
平成27年	5,503	+33	+0.6
令和2年	4,785	718	13.0

注) 就業者総数には分類不能を含む。

資料: 国勢調査

② 産業別の就業者数

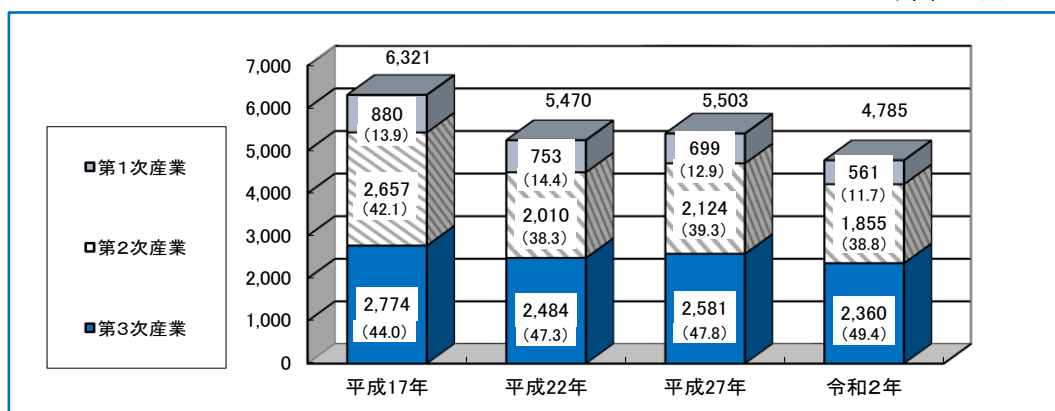
第1次産業と第2次産業に従事する町民の割合が高いことが本町の特徴だが、その人たちの減少が目立つ。

産業（3部門）別の就業者数は次のとおりで、農業、林業などの第1次産業と、建設業、製造業などの第2次産業が大幅に減少し、それら以外の第3次産業が微減傾向にあります。

それぞれの比率を全国及び福島県と比べると、第1次産業就業者比率と第2次産業就業者比率は全国平均や福島県平均を大幅に上回り、第3次産業就業者比率は全国平均や福島県平均を大幅に下回り、第1次産業（農林業）と第2次産業（製造業が約7割）に従事する町民の割合が高いことが本町の特徴となっています。

就業者総数・産業（3部門）別就業者数の推移

（単位：人・％）



注) 就業者総数には分類不能を含む（比率は分類不能を除いて算出）。資料：国勢調査

産業（3部門）別就業者比率の全国・福島県との比較（令和2年）

	全国	福島県	小野町
第1次産業就業者比率（％）	3.5	6.3	11.7
第2次産業就業者比率（％）	23.7	29.7	38.8
第3次産業就業者比率（％）	72.8	64.0	49.4

注) 比率は年齢不詳を除いて算出。

資料：国勢調査

2 町の特性

本町は、その昔、この地にやってきて当地方を治めた小野篁（おののたかむら）と、この地の長者の娘であった愛子（めすらこ）の間に生まれたとされている「小野小町」生誕の地伝説のある歴史ロマンが息づくまちです。



町の公式イメージキャラクター「小桜ちゃん」も小野小町をモチーフにデザインされています。



まちづくりを進めるうえで、本町の“強み”を活かす視点に立ち、本町の代表的な特性をまとめると、次のとおりです。

1 恵まれた立地条件・交通条件

本町は、郡山市といわき市のほぼ中間点に位置し、古くから福島県の沿岸部と内陸部をつなぐ交通の要衝として発展してきました。

現在、高規格道路として、磐越自動車道とあぶくま高原道路が走り、小野インターチェンジによって磐越自動車道と東北自動車道及び常磐自動車道がつながっているほか、公共交通として、JR磐越東線や路線バス、高速バスが走り、郡山市やいわき市へ容易にアクセスできるなど、交通の要衝としての位置づけは今も変わっていません。



さらに、本町と浜通り地方をつなぐふくしま復興再生道路の整備が進められており、様々な分野で本町の発展可能性が高まることが期待されています。

注) 写真やイラストはイメージ。
印刷時に適切なものと差し替え。

2 県立自然公園に代表される豊かな自然

本町は、山々に囲まれた丘陵地帯であり、緑輝く森林や田園地帯、太平洋に注ぐ夏井川やその支流のうるおいのある水辺空間、そして澄んだ空気に包まれた、豊かな自然が息づくまちです。

特に、高柴山、東堂山、矢大臣山の3地区は、優れた自然環境・景観を誇り、阿武隈高原中部県立自然公園に指定されており、高柴山にはヤマツツジ、矢大臣山にはアズマギクが群生し、多くの観光客が訪れます。

また、東堂山のスギ、高柴山のヤマツツジ、諏訪神社の大スギが「ふくしま緑の百景」に選ばれています。

夏井川両岸には、約5kmにわたって約1000本のソメイヨシノが咲き誇る桜の名所となっています。



3 おいしい農産物を生み出す農業

本町では、古くから葉たばこの生産が盛んに行われるなど、農業を主要産業として発展してきました。

現在、米づくりや畜産を主体に、準高冷地の冷涼な気候や昼夜の寒暖差の大きい地域特性を活かした野菜の生産などが行われています。

特に、健康な土で栽培されたトマト、いんげん、長いも、にんにくなどの「ミネラル野菜」は、本町の特産品となっています。

また、黒にんにくの加工・販売をはじめとする6次産業化の取り組みも行われています。



4 充実した子育て環境と教育環境

本町では、子育て世代包括支援センター^{※1}及び子ども家庭総合支援拠点^{※2}を設置しています。そのほか、認定こども園等との連携、一時預かりや放課後児童クラブをはじめとする様々な子育て支援サービスの提供、結婚から子育て期の段階的節目における切れ目のない経済的支援など、子育て世帯を支える取り組みを積極的に行い、充実した子育て環境にあります。

また、小中学校の教育環境の充実や「生きる力」を育む教育活動の推進、地域と連携したコミュニティ・スクール^{※3}の充実など、未来を担う子どもの教育環境の充実にも力を入れています。



5 安心して暮らせる保健・医療・福祉環境

本町には、地域の中心的な医療機関として、広域的に運営している公立小野町地方総合病院があるほか、郡山市やいわき市などの周辺都市の医療機関にも比較的近く、医科診療所が6か所、歯科診療所は3か所あるなど恵まれた医療環境にあります。

また、保健・福祉面においても、田村医師会、社会福祉協議会等と連携し、乳幼児期から高齢期までの切れ目のない保健サービスや、介護予防を重視した福祉・介護サービスの提供に取り組み、安心して暮らせる保健・医療・福祉環境にあります。



※1 妊娠期から子育て期にわたる総合的相談・支援を行う機能

※2 すべての子どもとその家庭及び妊産婦等の福祉に関する支援等を行う機能

※3 学校運営協議会制度。地域や学校の実情に応じて学校の運営に関して協議する学校運営協議会を設置し、地域とともにある学校づくりをしていくための仕組み。

3 町民ニーズ

本町では、計画策定への町民参画、町民ニーズの反映を重視し、町民・高校生・中学生を対象としたアンケート調査や「小野町まちづくりワークショップ」を行いました。

その概要と主な結果（抜粋）は、次のとおりです。

アンケート調査の概要

	町民	高校生	中学生
調査対象	18歳以上の町民	町内に居住する高校生（全員）	町内に居住する中学生（全員）
配布数	2,500	239	238
調査方法	郵送配布・返信用封筒による回収	郵送配布・返信用封筒による回収	学校での配布・回収
調査時期	令和4年6月	令和4年6月	令和4年6月
有効回収数	1,001	83	229
有効回収率	40.0%	34.7%	96.2%

「小野町まちづくりワークショップ」の概要

内 容	
参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一般公募町民 5人 ・ 各種団体代表者 15人 ・ 福島大学 学生 6人 ・ 郡山女子大学 学生 5人 ・ 福島工業高等専門学校 生徒 10人（ファシリテーター・グラフィッカー） ・ 振興計画策定本部ワーキンググループ員（オブザーバー）11人
グループ分け	<ul style="list-style-type: none"> ・ A班【子育て・教育・文化】 ・ B班【健康・福祉】 ・ C班【産業・観光・雇用】 ・ D班【生活環境・防災】 ・ E班【地域づくり（人づくり・協働）】
実施日と実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回 令和4年9月9日 テーマ：「<u>まちの将来像を考える</u>」（グループワークと発表） ・ 第2回 令和4年9月28日 テーマ：「<u>まちの課題を掘り下げる</u>」（グループワークと発表） ・ 第3回 令和4年10月26日 テーマ：「<u>課題の解決方法を考える</u>」（グループワークと発表）

(1) アンケート調査にみる町民ニーズ

① 町への愛着度と今後の定住意向(町民・高校生・中学生)

■町への愛着度

【町 民】“愛着を感じている” 68.0%

【高 校 生】“愛着を感じている” 59.1%

【中 学 生】“愛着を感じている” 66.3%

(“愛着を感じている”は「とても愛着を感じている」と「どちらかといえば愛着を感じている」の合計比率)

■今後の定住意向

【町 民】“住みたい” 68.6%

【高 校 生】“住みたい” 28.9%

【中 学 生】“住みたい” 38.0%

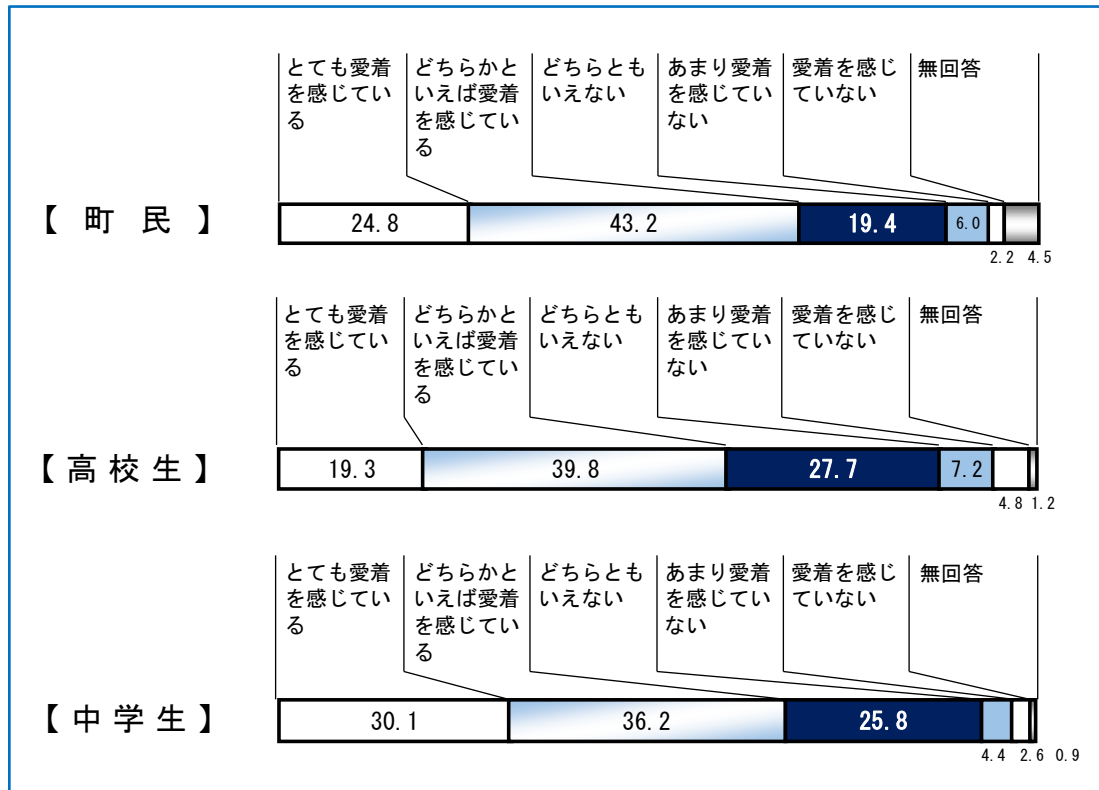
(“住みたい”は「住みたい」と「どちらかといえば住みたい」の合計比率)

町への愛着度と今後の定住意向については、上記のとおりで、愛着度は町民・高校生・中学生ともに高いものの、定住意向は高校生と中学生が目立って低く、「町に対して愛着を感じているが、住みたいとは思わない」という中高生が多いと考えられます。

これらのことから、高い愛着度を維持するとともに、中高生をはじめとする若い世代の定住意向を強める環境づくりをいかに進めていくかが今後の大きな課題としてあげられます。

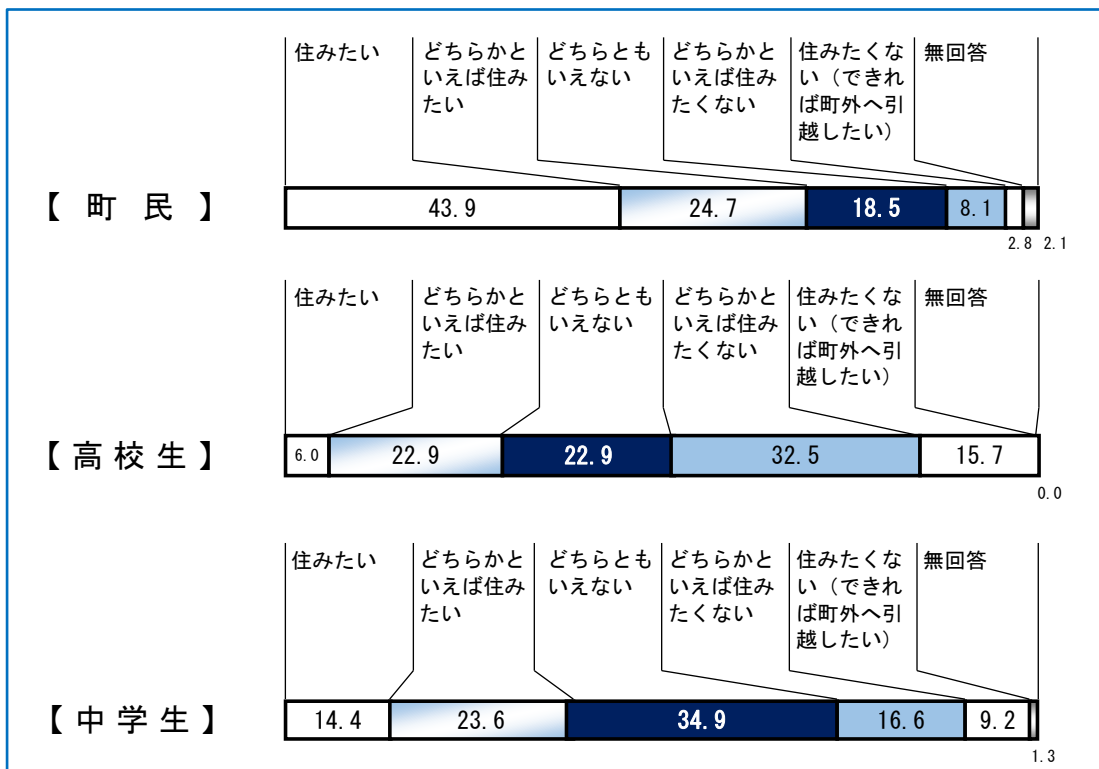
町への愛着度（町民・高校生・中学生）

（単位：％）



今後の定住意向（町民・高校生・中学生）

（単位：％）



② 町の各環境に関する満足度（町民）

■満足度が高い項目

- 第1位 消防・救急体制
- 第2位 防災体制
- 第3位 保健サービス提供体制
- 第4位 放射能対策
- 第5位 高齢者支援体制

■満足度が低い項目

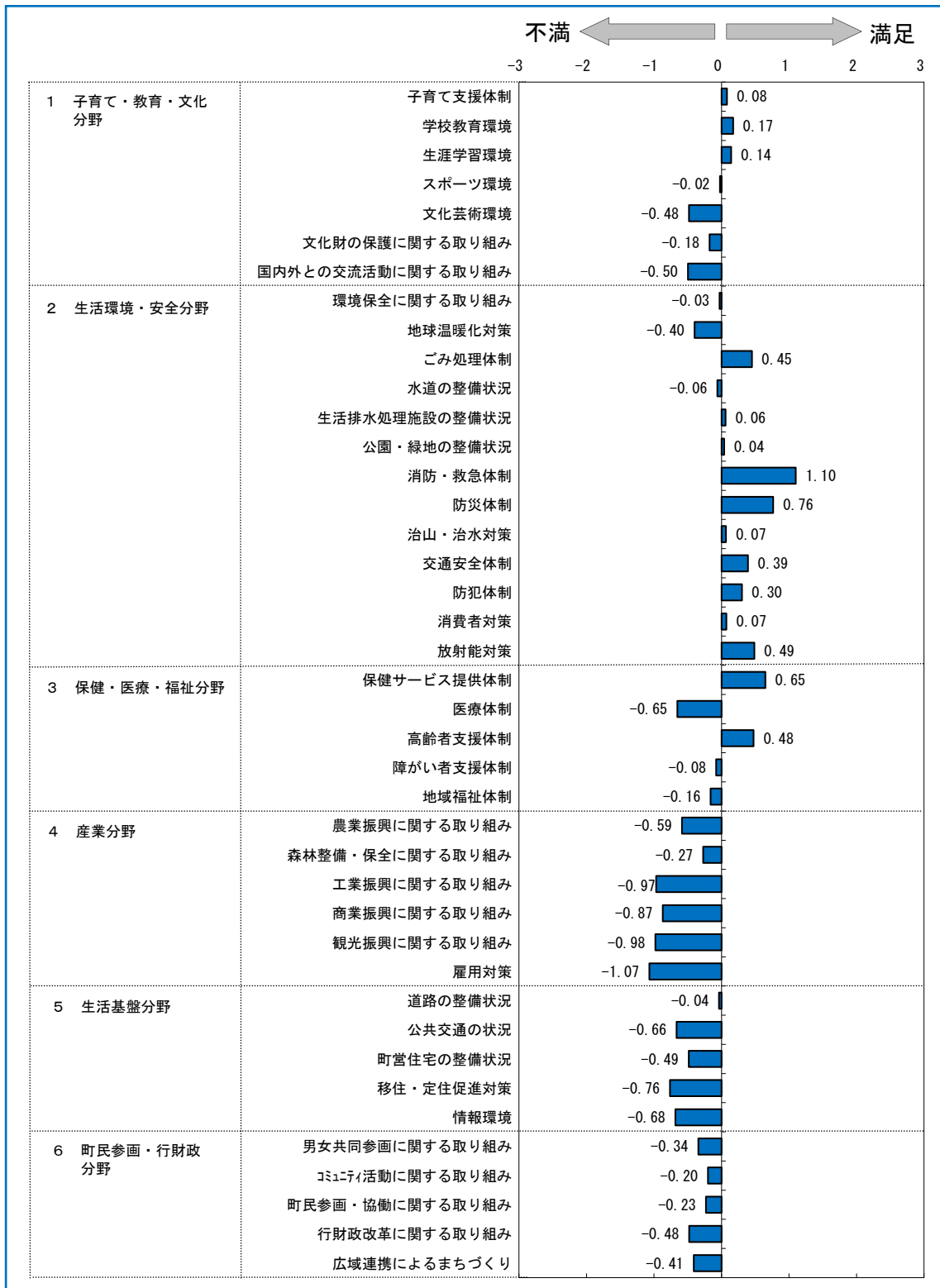
- 第1位 雇用対策
 - 第2位 観光振興に関する取り組み
 - 第3位 工業振興に関する取り組み
 - 第4位 商業振興に関する取り組み
 - 第5位 移住・定住促進対策
-

町の各環境に対する町民の満足度を把握するため、6分野 41 項目を設定し、項目ごとに、「満足している」、「どちらかといえば満足している」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば不満である」、「不満である」の5段階で評価してもらい、点数化しました。

その結果、上記のとおりで、生活環境・安全分野（特に安全分野）の満足度が高く、産業分野と生活基盤分野、行財政分野の満足度が低く、特に、雇用対策、観光、工業、商業、移住・定住、情報環境、公共交通等に関する項目の満足度が低く、これらに課題を残しているといえます。

町の各環境に関する満足度（町民）

（単位：評価点）



注) 評価点は、「満足している」の回答者数×10点+「どちらかといえば満足している」の回答者数×5点+「どちらともいえない」の回答者数×0点+「どちらかといえば不満である」の回答者数×-5点+「不満である」の回答者数×-10点)÷(それぞれの回答者数の合計)により算出。

③ 町の各環境に関する重要度（町民）

■重要度が高い項目

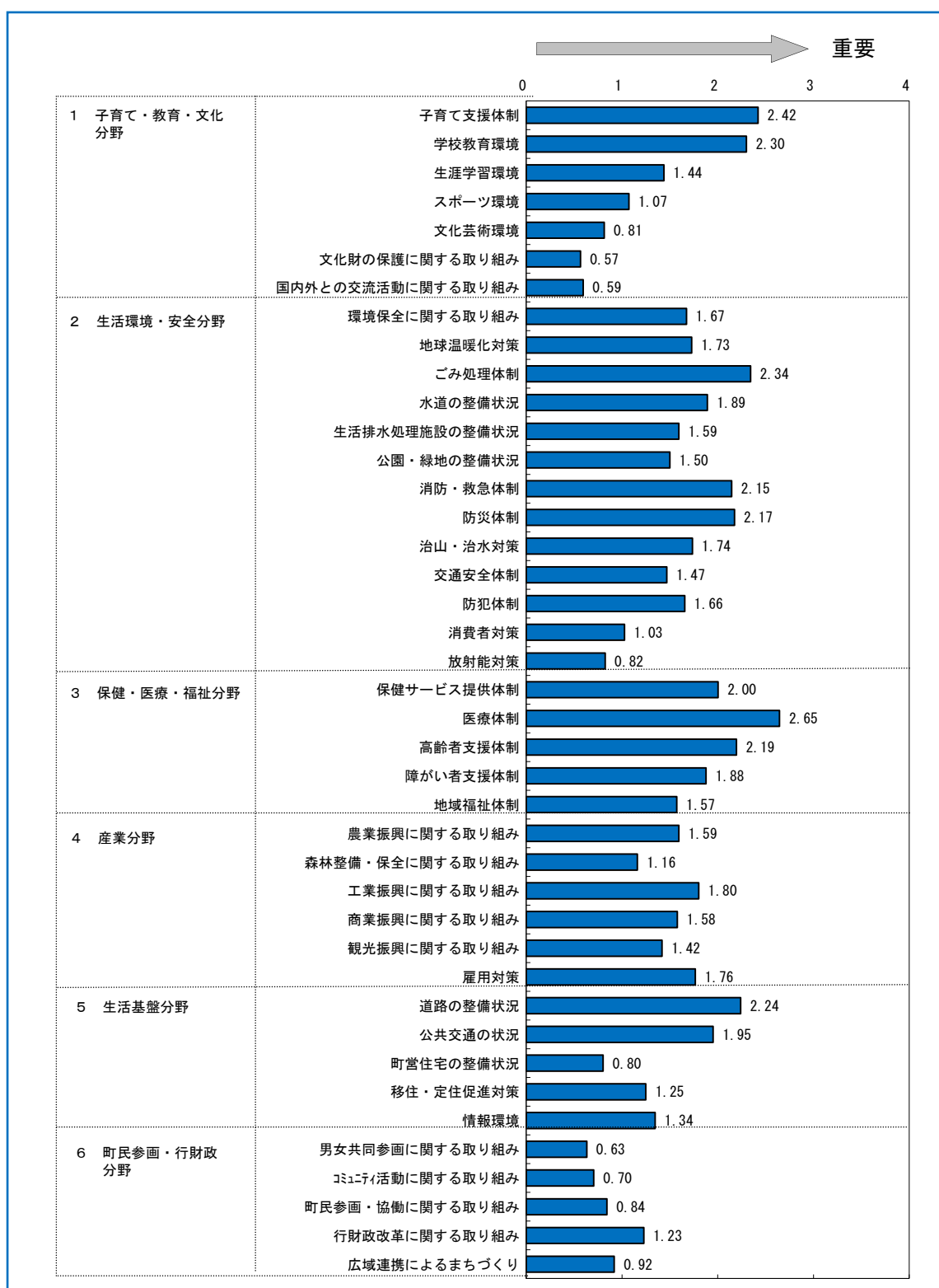
- 第1位 医療体制
 - 第2位 子育て支援体制
 - 第3位 ごみ処理体制
 - 第4位 学校教育環境
 - 第5位 道路の整備状況
 - 第6位 高齢者支援体制
 - 第7位 防災体制
 - 第8位 消防・救急体制
 - 第9位 保健サービス提供体制
 - 第10位 公共交通の状況
-

町の各環境に対する町民の重要度を把握するため、満足度と同じ6分野41項目について、「重視している」、「やや重視している」、「どちらともいえない」、「あまり重視していない」、「重視していない」の5段階で評価してもらい、点数化しました。

その結果、上記のとおりで、これら上位10項目をみると、生活環境・安全分野の項目が3項目、保健・医療・福祉分野の項目が3項目、子育て・教育・文化分野の項目が2項目、生活基盤分野の項目が2項目となっており、“快適で安全な住環境の整備”と“保健・医療・福祉の充実”、“子育て環境・教育環境の充実”、そして“道路・公共交通の充実”が重視されていることがうかがえます。

町の各環境に関する重要度（町民）

（単位：評価点）



注) 評価点は、「重視している」の回答者数×10点+「やや重視している」の回答者数×5点+「どちらともいえない」の回答者数×0点+「あまり重視していない」の回答者数×-5点+「重視していない」の回答者数×-10点)÷(それぞれの回答者数の合計)により算出。

④ 今後のまちづくりの特色（町民・高校生・中学生）

■今後のまちづくりの特色

【町民】

第1位 子育て・教育のまち

第2位 健康・福祉のまち

第3位 安全・安心のまち

【高校生】

第1位 商工業のまち

第2位 快適住環境のまち

第3位 子育て・教育のまち

【中学生】

第1位 子育て・教育のまち

第2位 安全・安心のまち

第3位 快適住環境のまち

今後のまちづくりの特色については、上記のとおりで、町民については、前問の「町の各環境に関する重要度」の結果を裏づけるように、“子育て環境・教育環境の充実”や“保健・医療・福祉の充実”、“災害に強く、犯罪・事故のないまちづくり”が重視されていることがうかがえます。

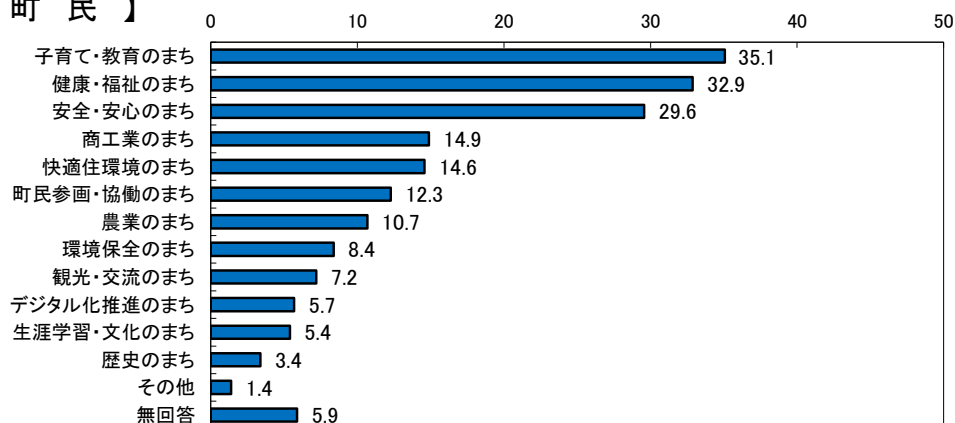
高校生及び中学生のアンケート結果と比較すると、かなりの違いがみられますが、「子育て・教育のまち」が共通して重視されており、年齢層にかかわらず、“子育て環境・教育環境の充実に関心が集まっていることがうかがえます。

また、高校生では「商工業のまち」が第1位で、“買物の場や働く場の充実”が重視されていること、中学生では「安全・安心のまち」が第2位で、“災害に強く、犯罪・事故のないまちづくり”が重視されていることが特徴的な結果となっています。

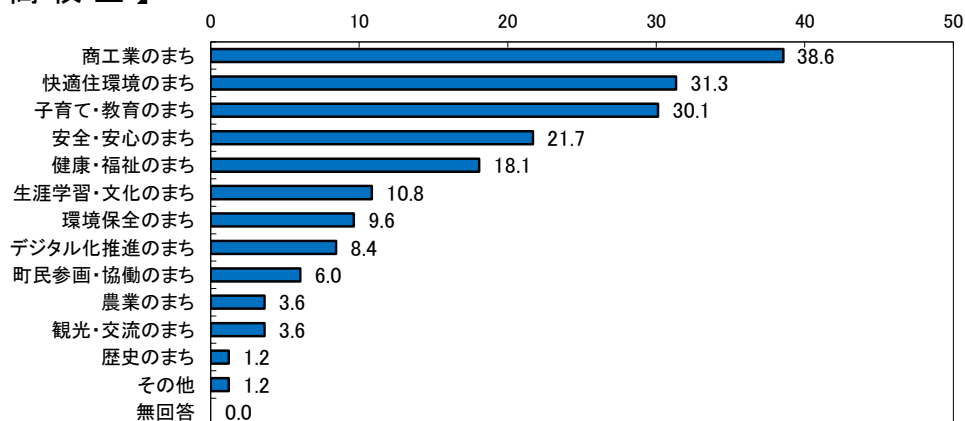
今後のまちづくりの特色（町民・高校生・中学生）

（単位：％）

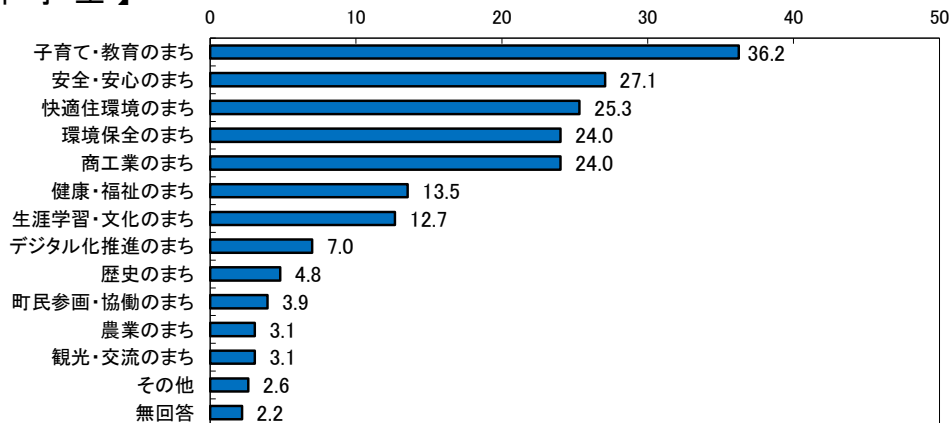
【町民】



【高校生】



【中学生】



(2) 「小野町まちづくりワークショップ」にみる提案

班	まちの将来像 込めた想いや まちの強み、らしさ	課題	課題の 解決方法
A班 【子育て・ 教育・文化 分野】	未来を育み守る 離れたくない町 小野町 <ul style="list-style-type: none"> ・町の人々のつながり ・個性的な方が多い ・自分の意見、生き方がある ・高齢者の方がやさしい ・災害や犯罪が少ない ・故郷として帰ってきたいまち ・みんなで子供を育てるまち ・子どもの個性を伸ばせるまち ・離れたくないまち ・災害から守られるまち ・健康第一のまち ・協力しあえるまち ・子育てを楽しくできるまち 	①学力や運動能力の低下 <ul style="list-style-type: none"> ・集中力がない→運動する機会の減少 ・部活やスポ少の選択肢が少なく、やりたいスポーツが無かったり、親にやらされている ・親も送迎の負担やお金がかかる ②子供が減少し、歴史の継承ができない <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者と若い世代のコミュニケーションが少なく、若い人の意見が尊重されなかったり、若い世代に任せてもらえなかったりする ・時代が変化しているにもかかわらず、創造する体制がつけられていない ・料理や祭りなど、中学生までの思い出作りが無いと地元離れが進む 	①習慣づくり <ul style="list-style-type: none"> ○行政 イベントの企画提案・情報発信 ○企業 イベントへの参加促進・提案 ○家庭 子どもと一緒に勉強や運動をする ②高齢者とのコミュニケーションを増やす <ul style="list-style-type: none"> ○行政 機会を創出する ○企業 資金提供 ○家庭 子どもとのコミュニケーションを増やす
	挑戦できる！安心できる！愛があふれる！緑があふれる！ できるとあふれるがいっぱい 小野町 <ul style="list-style-type: none"> ・笑顔、活気、愛、緑があふれる ・スポーツ、レジャー、勉強、仕事に挑戦できる ・美しい自然、心優しい、文化のまち ・可能性がたくさん ・若者が遊べるまち ・安全、安心のまち(地盤が強い) ・アクセスがいいまち ・スポーツが盛んなまち ・自然に恵まれている ・習い事が充実しているまち ・若者が主体的に挑戦できるまち 		
B班 【健康・福 祉分野】	ゼロ(ono)から 共に作ろう dreamtown 小野 <ul style="list-style-type: none"> ・住み心地のいいまち ・共に生きるまち ・空気がいい ・発展を楽しむまち ・可能性のまち ・伸びざかりなまち ・「昭和」を感じる ・自然あり！人好し！ 	①人が集まらない ②情報発信不足 <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化が進んでいる ・若者の減少による企業の撤退 ・農業の施設に対する補助がないため隣の市との格差が大きい ・若い家族が転出してしまふ ・魅力がない ・保育料が高い 	①健康促進啓発活動 <ul style="list-style-type: none"> ○行政 ・メタボの未来に関する動画の作成 ・食事の記録や歩数の目標達成者に特産品やポイントをプレゼントする ・運動トレーナーを呼び込み、ジムを活性化させ、町民の運動を促進する ②要介護者を減らす <ul style="list-style-type: none"> ○行政 介護予防啓発活動 ○自治会・町民 ・地域の仕組みづくり ・町民同士が支え合う
	ゼロ(ono)から 共に作ろう dreamtown 小野 <ul style="list-style-type: none"> ・住み心地のいいまち ・共に生きるまち ・空気がいい ・発展を楽しむまち ・可能性のまち ・伸びざかりなまち ・「昭和」を感じる ・自然あり！人好し！ 		
C班 【産業・観 光・雇用分 野】	ゼロ(ono)から 共に作ろう dreamtown 小野 <ul style="list-style-type: none"> ・住み心地のいいまち ・共に生きるまち ・空気がいい ・発展を楽しむまち ・可能性のまち ・伸びざかりなまち ・「昭和」を感じる ・自然あり！人好し！ 	①人が集まらない ②情報発信不足 <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化が進んでいる ・若者の減少による企業の撤退 ・農業の施設に対する補助がないため隣の市との格差が大きい ・若い家族が転出してしまふ ・魅力がない ・保育料が高い 	○企業 <ul style="list-style-type: none"> ・アイスバーガーを広める ・他の地域で売る、コンテスト開催、オリジナルがつけられるようにする。給食での提供等 ・インドネシアタウンを作る ・ふるさと納税返礼品拡充 ・限定定期ちゃん、農業体験 ・移動レストラン(夜も) ○住民 <ul style="list-style-type: none"> ・町内への就職 ・情報発信 ○行政 <ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校の設置 ・ネット環境の整備
	ゼロ(ono)から 共に作ろう dreamtown 小野 <ul style="list-style-type: none"> ・住み心地のいいまち ・共に生きるまち ・空気がいい ・発展を楽しむまち ・可能性のまち ・伸びざかりなまち ・「昭和」を感じる ・自然あり！人好し！ 		

班	まちの将来像 込めた想いや まちの強み、らしさ	課題	課題の 解決方法
D 班 【生活環 境・防災分 野】	若者来なんしょ どこでも行ける いつでも帰れる 自然とスポーツがあふれる町 小野町	①災害対応の体制強化 消防団の新入団員の確保 ・人命に関わる ・安否確認がしづらい ・災害対応が悪い所に住みたいと思わない ・自然相手のことなので、さきが読めない、お金がない ・災害現場で迅速な動きが出来ない（団員の高齢化） ・日中の災害で動けない ・飲み会等のコミュニケーションが嫌だ ・年代がバラバラ、入りづらい ・消防団＝カッコいい、素敵というイメージがない ②道路環境の管理 ・高齢化が進んで草刈り等の作業ができない ・イベントがないと道路を直してもらえない ・利用頻度による整備の差 ・予算が無い	①防災訓練の強化 ○企業・事業者 消防団員への理解を深める ○行政 ・安否確認 ・安全対策 ・小中学生のうちから消防団の役割の重要性を理解してもらう ・イベントの実施 ②道路の補修・環境美化・事故防止 ○行政 ・草刈イベントなどの実施 ・予算確保 ・道路維持専門の部門をつくる ○町民 住民同士で話し合い、防止意識を高める。
	交通の利便性の高さとお野町の将来を担う若者へ焦点を当てて、小野町の強みを活かしたキャッチフレーズ ・交通網が多岐にわたるまち ・運動を楽しめるまち ・美味しい店のあるまち ・スポーツが盛んなまち ・自然を気軽に体験できるまち ・芸術、文化の香るまち ・交通、地理の強み		
E 班 【地域づくり（人づくり・協働）分野】	“みんな”が 観光大使のまち	①情報発信が足りない ・活かせられる SNS がない ・発信方法が若者に対して適切でない ②人材不足 ・情報発信するにも人材がない ・就職したいところが少なく人が留まらない ・若者の転出が多い	まちの SNS 部をつくる ○企業 SNS の基盤をつくる ○行政 学びの場（特に発信力）を増やす ○町民 ・基盤のできた SNS で発信する ・中高生や一般町民を活用する （例） ・プラットフォームとなるメインアカウントを作成 ・メインから枝分かれしたご飯屋さんや景観、リカちゃんなどそれぞれに特化したアカウントを作成⇒趣味人に任せる ・町を知るきっかけに活用 ・競争意欲を掻き立てるために町民にはいいね数に応じて景品を用意 ・企業には広告などの利益を与える
	【魅力発信を上手に】 ・地元の人でも魅力を知る ・自分たちのまちという意識を大事に ・地元民みんなが自分の思う小野町の魅力を考える 【魅力】 ・伝統のあるお祭り ・安全（災害が少ない） ・みんなが地元の魅力を知っているまち ・あそびが仕事になるまち ・絆あふれるまち ・Uターンする若者が多い ・年収 1,000 万稼げるまち ・観光地があって楽しめる ・魅力の発信がうまいまち		

4 社会環境の変化

地方自治体が、今後のまちづくりにおいて踏まえるべき代表的な社会環境の変化をまとめると、次のとおりです。

1 少子高齢化・人口減少の急速な進行

わが国では、出生数の低下に歯止めがかからず、少子化がさらに深刻化しつつあるとともに、高齢化も世界に類をみない速度で進んでおり、すでに超高齢社会を迎えています。

さらに、少子化の進行に伴い、わが国全体の人口も急速に減少してきています。

このような中、将来にわたって活力ある社会を維持していくため、少子高齢化の進行に即した社会づくりと、戦略的な人口減少対策の推進が求められます。

2 安全・安心への意識の高まり

未曾有の被害をもたらした東日本大震災をはじめ、全国各地で大規模な自然災害が頻発しているほか、悲惨な交通事故や子どもを巻き込む犯罪、なりすまし詐欺などの特殊詐欺による被害の増加、新型コロナウイルス感染症の流行などを背景に、人々の安全・安心に対する意識がさらに高まっています。

このような中、災害や事故、犯罪に対する危機管理体制の強化、感染症対策の推進など、あらゆる分野で安全・安心の視点を重視した取り組みを進めていくことが求められます。

3 地方の産業・経済の低迷

新型コロナウイルス感染症流行や物価高等の影響による景気の悪化をはじめ、少子高齢化・人口減少の進行による担い手不足などを背景に、地方の産業・経済をめぐる情勢は厳しさを増しています。また、これらに伴い、地方における雇用の場の不足が大きな問題となっています。

このような中、地域特性を活かした農業や商工業、観光の振興、企業の誘致をはじめ、地方産業に活力を取り戻す取り組みを進めていくことが求められます。

4 環境・エネルギーへの意識の高まり

地球温暖化がさらに深刻化し、気温の上昇だけではなく、気候変動により、大規模な自然災害の発生、生態系の変化、農業への影響、感染症・熱中症の増加など、重大な問題を引き起こしています。

わが国では、世界的な動向を踏まえ、令和32年までにカーボンニュートラル^{※4}を実現する目標を掲げています。

このような中、自然環境の保全や廃棄物の減量化・資源化、再生可能エネルギーの導入をはじめ、脱炭素社会の実現に向けた取り組みを進めていくことが求められます。

5 デジタル社会の到来

様々な情報通信機器・サービスの普及などにより、だれもが様々な情報を瞬時に受発信することができる環境が実現しました。

また、ロボットやドローン^{※5}、AI^{※6}が生活に身近なものとなるなど、Society5.0^{※7}といわれる新たな社会を迎えつつあるほか、自治体DX^{※8}が進められています。

このような中、本町においても、こうしたデジタル化を、これからのまちづくりに欠かせない社会基盤として認識し、積極的に取り組んでいくことが求められます。

※4 主として人間の活動によって排出される二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスの排出量と、森林や植物が吸収する温室効果ガスの吸収量が等しくなること。

※5 無人で沿革操作や自動制御によって飛行できる航空機。

※6 Artificial Intelligence の略。人工知能。

※7 仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）。

※8 自治体デジタル・トランスフォーメーション。住民の利便性の向上や業務の効率化等に向けたデジタル技術の活用による行政サービスの改革。

6 支え合う社会づくりの重要性の高まり

人口構造の変化や人々の価値観の多様化などを背景に、地域における人と人とのつながりが弱まってきていることが指摘されており、支え合う機能、自治機能の低下が懸念されています。

しかし、自然災害が頻発する中、地域で支え合い、地域の課題を地域自らで解決していくことの重要性が再認識されてきています。

このような中、あらゆる分野において、人と人々が支え合い、ともに生きるまちづくり、コミュニティ機能の維持・充実に向けた取り組みを進めていくことが求められます。

7 地方の自立と住民協働の時代の到来

地方自治をめぐる情勢が大きく変化する中、これからの地方自治体には、地域における多様な人的資源を積極的に活用し、地域の発展に向けた独自の政策を自ら考え、自ら実行していくことができる力、いわば自立力が必要とされます。

このような中、住民をはじめ町民団体や民間企業等の多様な主体の参画・協働を促していくとともに、さらなる行財政改革による行財政運営の一層の効率化を進め、将来にわたって自立可能・持続可能な体制を確立していくことが求められます。

8 SDGsに基づく取り組みの進展

平成 27（2015）年に「国連の持続可能な開発サミット」で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称）は、令和 12（2030）年までに持続可能でよりよい世界を目指すため、「貧困をなくそう」・「飢餓をゼロに」・「すべての人に健康と福祉を」などの 17 の国際目標と 169 の達成基準で構成されています。

これを達成するための取り組みが世界各国で進められており、わが国においても、推進本部を設置し、積極的に取り組んでいます。

このような中、こうした世界や国の動きを十分に踏まえ、共通目標の達成に向けた活動に取り組んでいくことが求められます。



5 町発展に向けた主要課題

本町の特性や町民ニーズ、社会環境の変化等を総合的に勘案し、町発展に向けた主要な課題をまとめると、次のとおりです。

(1) 最重要課題

人口減少の抑制による活力ある小野町の維持

人口減少が加速し、県中地域 12 市町村で3番目に高い減少率となっている中、本町の最も重要かつ緊急の課題は、「人口減少を抑制し、将来にわたって活力ある小野町を維持すること」です。

人口減少を抑制するためには、生まれる子どもを増やし、亡くなる人を減らすこと（自然減対策）と、転入する人を増やし、転出する人を減らすこと（社会減対策）を同時に進めていくことが必要です。

そのためには、少子化対策や移住対策などの特定の取り組みだけでなく、各分野における様々な取り組みをトータルで進め、本町の魅力や住みやすさを総合的に高めていかなければなりません。

(2) 分野ごとの主要課題

1 子育て支援の充実と未来を担う人材の育成

国や福島県の水準を上回って少子化が進むとともに、学校教育や人材育成への関心が高まる中、“子育て環境・教育環境の充実”を求める町民の声が強くなっています。

このため、充実した子育て環境・教育環境等をさらに活かしながら、子どもを生きやすく育てやすい環境づくりを一層進めていくとともに、未来を担う人材の育成に向けた学校教育の充実や、町民主体の生涯学習・文化・生涯スポーツ活動の活発化を進めていく必要があります。

2 すべての町民がいきいきと暮らせる健康づくり

国や福島県の水準を大幅に上回る勢いで高齢化が進む中、“保健・医療・福祉の充実”を求める町民の声が強くなっています。

そのため、充実した医療環境や保健・福祉環境等をさらに活かしながら、地域医療体制や健康づくり・福祉・介護体制の一層の強化を図り、すべての町民がいきいきと暮らせる健康づくりを進めていく必要があります。

3 だれもが住みたくなる安全で快適な生活環境の整備

安全・安心や環境・エネルギーへの意識が高まる中、“災害に強く、犯罪・事故のないまちづくり”、環境と共生する”快適な生活環境の整備“を求める町民の声が強くなっていると同時に、生活基盤分野全般に関する町民の満足度が低くなっています。

このため、豊かな自然が息づくまちとしての特性等をさらに活かしながら、危機管理体制の強化、循環を基本とした美しく快適な環境づくり、道路・公共交通の充実など、だれもが住みたくなる生活環境づくりを進めていく必要があります。

4 地域特性を活かした産業の振興と観光機能の強化

地方の産業・経済が低迷する中、本町においても、各産業を取り巻く状況は厳しく、産業分野全般に関する町民の満足度が低くなっています。

そのため、恵まれた立地条件・交通条件や豊かな自然等をさらに活かしながら、地域に密着した産業支援施策を推進し、地域特性を活かした農業・商工業の振興と観光機能の強化を進めていく必要があります。

5**町の情報発信と定住・移住を支援する取り組みの強化**

人口減少を抑制し、本町を持続的に発展させていくためには、子育て環境・教育環境や保健・医療・福祉環境の充実、生活環境・生活基盤の整備、産業の振興はもとより、こうした本町の現状や取り組み、そして魅力を、町内外の人々に知ってもらうとともに、定住・移住のきっかけづくりを進めていくことが重要です。

そのため、恵まれた立地条件・交通条件などの本町の魅力をはじめ、本町の情報を町内外に広く発信していくとともに、多様な方々と交流を深めるなど、定住・移住を直接的に支援する取り組みを強化していく必要があります。

6**町民力の結集と行財政運営のさらなる効率化**

地方の自立が強く求められる中、限られた財源を有効に活用し、自立可能・持続可能な小野町をつくるためには、地域づくりをはじめとした様々な活動に取り組む多様な担い手の力を結集するとともに、行財政体制を一層強化していくことが求められます。

そのため、町民、地域、団体、民間企業、教育機関等の多くの主体の参画・協働体制を更に強化し、協働のまちづくりや、行財政運営のさらなる効率化を進めていく必要があります。

第 2 部 基本構想

第1章 小野町の将来像

1 まちづくりの基本姿勢

総論を踏まえ、これからのまちづくりにおいて、すべての分野にわたって基本とする姿勢を次のとおり定めます。

1

『人』を大切にし、『人』を育てる。

町民一人ひとりの命や個性、暮らしを大切にするとともに、一人でも多くの子どもが生まれるまちづくり、あらゆる分野において、将来の担い手を育てるまちづくりを進めます。

2

『住みたくなるまち』をつくる。

安全性や利便性、快適性をはじめ、町の魅力や住みやすさを総合的に高め、町民がずっと住みたくなる、町外の人の本町に移り住みたくなるまちづくりを進めます。

3

『みんな』で進める。

町民や地域、団体、民間企業、教育機関など、本町にかかわる多くの主体と行政との連携・協働体制の一層の強化を進め、それぞれの立場からみんなでまちづくりを進めます。

2 将来像

将来像は、本町が5年後に目指す姿を示すものであり、これからのまちづくりの象徴となるものです。

総論及びまちづくりの基本姿勢に基づき、すべての分野において、本町の“強み”を活かしながら、『人』を大切にし、『人』を育てるまちづくり、『住みたくなる』まちづくりを『みんな』で進め、町民一人ひとりが、将来に夢と希望を持ち、生きがいに満ちた人生を送ることができる町を目指す将来像を定めます。

3 人口の推計と見通し

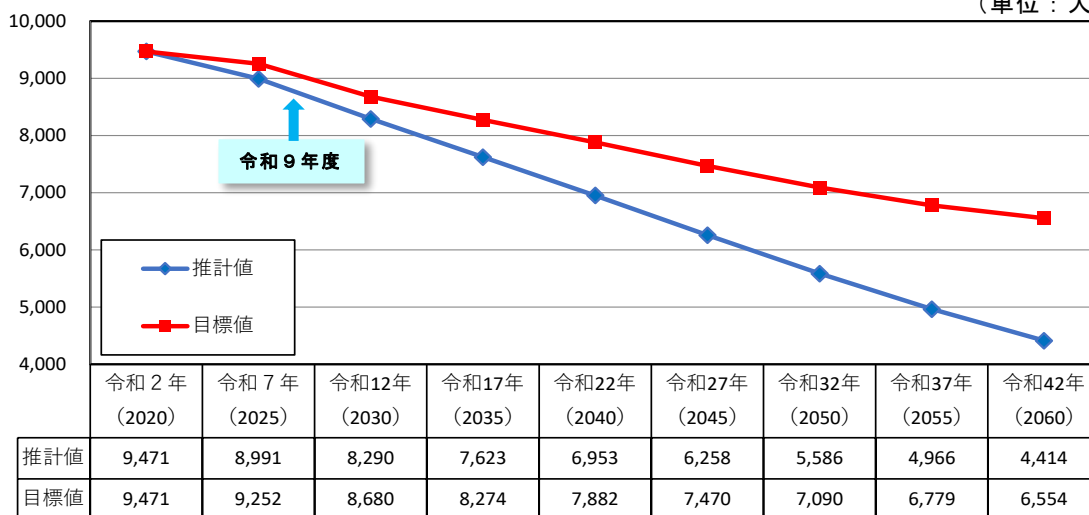
国が提供した推計ツールを使用し、本町の人口（国勢調査ベース）を推計すると、次のとおりとなっています（「小野町人口ビジョン※⁹【第1版】」より）。

なお、同ビジョンでは、本町の将来人口目標として、令和42（2060）年に6,554人を目指すと定めており、本計画の目標年度である令和9（2027）年度の推計値と目標値については、その過程の数値（按分して算出）となっています。

令和9（2027）年度の人口の推計値と目標値

推計値：8,711人
目標値：9,032人

長期的な人口の推計値と目標値（「小野町人口ビジョン【第1版】」より）
（単位：人）



注1) 令和2年は実績値。

注2) 推計値は、国提供の推計ツール（平成27年福島県版）による。

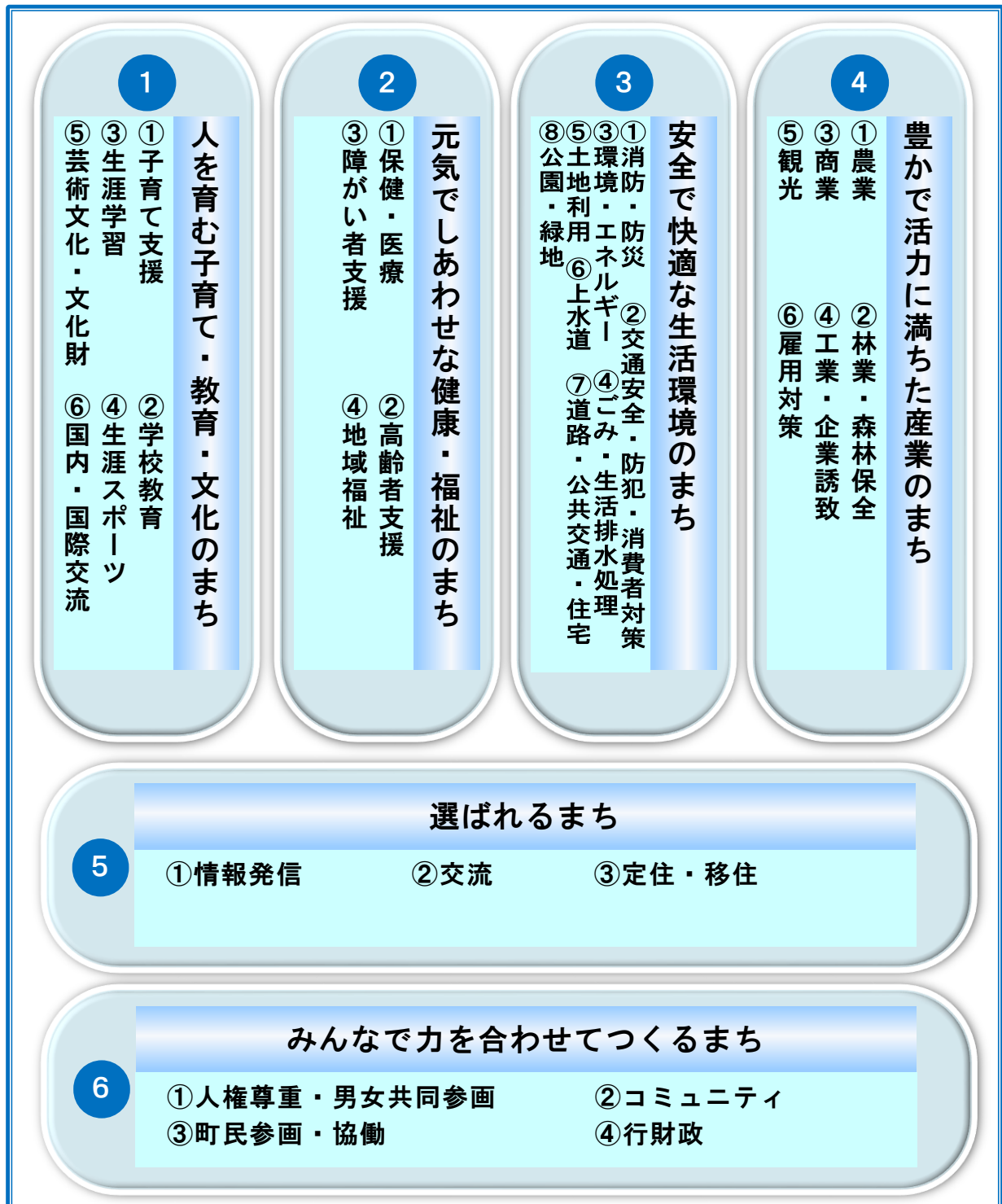
注3) 目標値は、合計特殊出生率や社会増減を望ましい値に設定した町独自の推計による。

※⁹ 小野町の総人口や年齢構成がどのように変化してきたか、その要因はどのようなものであったかを分析し、人口の将来展望を示すもの。

第2章 計画の体系と方針

1 計画の体系

将来像の実現に向け、計画の体系（6つの基本目標と31の政策分野）を次のとおり定めます。



2 基本目標ごとの方針

(1) 人を育む子育て・教育・文化のまち

- ①子育て支援
- ②学校教育
- ③生涯学習
- ④生涯スポーツ
- ⑤芸術文化・文化財
- ⑥国内・国際交流



町の宝である子どもが一人でも多く生まれ、健やかに育つよう、結婚から妊娠・出産・子育てに至る切れ目のない支援を一層推進し、町全体で子育て世帯を支える体制の強化を図ります。

また、子どもたちが、これからの社会を生き抜く力を身につけ、未来を担う人材として成長していくことができるよう、コミュニティ・スクールをはじめ、学校教育環境の充実を図ります。

さらに、人材の育成に向け、町民が生涯を通して自ら学び、その成果を地域社会に活かせる環境づくりを進めるほか、町民主体の文化・スポーツ活動、国内外の地域との交流活動の促進に努めます。

(2) 元気でしあわせな健康・福祉のまち

- ①保健・医療
- ②高齢者支援
- ③障がい者支援
- ④地域福祉



人生100年時代を見据え、長い人生を健康で元気に暮らすことができるよう、町民主体の健康づくりの促進を基本に、疾病予防・重症化予防に向けたきめ細かな保健サービスの提供を図るとともに、広域的な連携のもと、地域医療体制の充実を進めます。

また、高齢者や障がい者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、介護・福祉サービスの充実や社会参加・生きがいづくりの促進に努めるほか、だれもが自分のこととして支え合う地域福祉活動の促進に努めます。

(3) 安全で快適な生活環境のまち

- ① 消防・防災
- ② 交通安全・防犯・消費者対策
- ③ 環境・エネルギー
- ④ ごみ・生活排水処理
- ⑤ 土地利用
- ⑥ 上水道
- ⑦ 道路・公共交通・住宅
- ⑧ 公園・緑地



高齢者の急増など近年の環境変化を踏まえ、安全・安心なまちづくりを進めるため、消防・防災体制の一層の強化、河川改修など治水対策の促進を図るとともに、交通安全・防犯・消費者対策を推進します。

また、町外の人も本町に移り住みたくなる、環境と共生する快適で便利な生活環境づくりを進めるため、総合的な環境対策やごみ処理・リサイクル対策、生活排水処理、脱炭素社会の実現に向けたエネルギー対策、計画的な土地利用、交通の要衝である利点を活かしたまちづくりを進めるほか、上水道の充実、道路・交通・住宅対策の充実、公園・緑地の整備充実を進めます。

(4) 豊かで活力に満ちた産業のまち

- ① 農業
- ② 林業・森林保全
- ③ 商業
- ④ 工業・企業誘致
- ⑤ 観光
- ⑥ 雇用対策



主要産業である農業の維持・発展に向け、多様な担い手の育成・確保や6次産業化・発酵のまちづくりの促進をはじめ、多面的な農業振興施策を推進するとともに、森林の適正管理・整備を促進します。

また、町のにぎわいと活力の再生・創造に向け、商工業事業所の経営の継続・安定化の支援、新たな企業の立地促進に努めるほか、観光客の増加と観光から移住への展開を見据え、豊かな自然をはじめとする地域資源の充実・活用により、観光機能の強化を図ります。

さらに、これらの産業振興施策と連動し、雇用の確保・拡大に向けた取り組みを推進します。

(5) 選ばれるまち

- ①情報発信
- ②交流
- ③定住・移住



本町の知名度の向上と交流人口・関係人口の増加、選ばれるまちづくりに向け、ホームページやSNSをはじめとする様々な情報媒体・機会を活用し、「小野町の魅力」に関する効果的・戦略的な情報発信・プロモーション活動や多様な方々との交流活動を推進します。

また、空き家・空き地バンクや移住相談の充実、住宅建設等に関する経済的支援をはじめ、定住・移住を支援する取り組みを積極的に推進します。

(6) みんなで力を合わせてつくるまち

- ①人権尊重・男女共同参画
- ②コミュニティ
- ③町民参画・協働
- ④行財政



すべての人がお互いの人権を尊重し、ともに生き、ともに活躍することができるよう、人権尊重社会・男女共同参画社会の形成に向けた教育・啓発や環境整備を進めます。

また、支え合う地域づくり、地域住民自らによる地域課題の解決に向け、行政区や隣組などの枠組みを超えたコミュニティ活動の支援を行うとともに、多様な主体と力を合わせてまちづくりを進めるため、町民や町民団体、民間企業、高等教育機関等の積極的な参画・協働を促進します。

さらに、町民ニーズの向上に向け、公共施設等の整備を計画的に進めるほか、行財政運営の効率化に向け、さらなる行財政改革の推進や収納対策の強化、公共施設等の総合的な管理、広域連携の強化を図ります。

小野町総合計画（2023～2027） 総論・基本構想の構成

